慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	所謂秦銅器に就いて
Sub Title	
Author	梅原, 末治(Umehara, Sueji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1931
Jtitle	史学 Vol.10, No.3 (1931. 9) ,p.69(411)- 96(438)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19310900-0069

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

所謂秦銅器に就いて

一

一九二三年（即ち大正十二年）に北支那を旅行して古代の工藝美術品の蒐集に從事してゐた佛蘭西の美術商のワニエック氏（L. Wannieck）は、山西省歸化城の北約百里の Li-Yü で其の年發見せられた多數の古銅器のフンドを獲得したのみならず、それが一個の窟狀をした遺跡から出土したことを確め、人を派して其の地を再査せしめた結果、更に少量の漆器斷片、土器片、子安貝、玉、銅器殘缺等を得て、支那に於ける此の珍らしい發見地乃至共存物の知られた遺物を巴里に齎し歸つた。處が此の遺物群（フンド）のうちの多數を占めてゐる銅器は、從來世人の見慣れた三代や漢の器とは違つた特色を多分に持つてゐるのに加へて、氏の手から佚した一個の戈に秦代の銘があつたと云ふ處から、當初遺品を獲た支那人の假りに附した秦銅器なる名稱が殆んど無條件に受け容れられて、それがワニエック氏の宣傳に依つて、忽ちに西歐の東洋學者の注意と興味とを惹くことになつた。尤もかく秦銅器なる稱呼を與へられたワニエック氏將來品の示

す特徴の銅器は、これが初見ではなくて、同じ類が既に早く宋代の『博古圖錄』に載せられて居り、前清朝になつては『西清古鑑』『西清續鑑』『寧壽鑑古』等に少なからざる遺例を錄して、其の或物は今日なほ實物を北平の武英殿裡に見得るのであるが、是等は或は周代の遺品とし、或者は漢と判じて、一の特色を持つ形式として取扱はれてゐず、また器が殆んど無銘であるところから、支那の金石學者には輕視せられて、時には故岡倉覺三氏の如く支那の古物商の言に聞いて、其の類を呼ぶに秦器とした人士もあつたとは云へ一般には全く顧みられないと云ふ狀態であつた。さればワニエック氏の此の將來品は新奇なものとして、歐米に於ける支那古器物の愛好家に强い刺激を與へ、その機緣から從來埋もれた類例が世に出て資料を豐富にすると共に、該銅器の特質に對する考察は、他方ほゞ同時に世に出た支那に於ける所謂スキタイ系銅製品と相俟つて、漢土の古銅器の研究に新生面を開展するの形勢を馴致するに至つたのである。

私の此の類の遺品に對する關心は一九二六年の秋にはじまる。恰も歐洲にあつて秦銅器の觀賞の盛況を呈した其の年の初英國に着いた私は、同地に於ける優れた支那古物の蒐藏家の一人として知られた故ラザストン氏(Late Charles Lambert Rutherston)から完好な一例を示され、つゞいで同氏の紹介で其の冬巴里でワニエック氏の手に殘存した Li-Yü の出土品を通觀、それが多くの人士の云ふ如く從來普通に說かれてゐる支那の古銅器とはやゝ趣の違つたものなのを看取した。で氏に請ふて、一々の器に就いての

より精密な考古學上の觀察を行ひ、其の特質なるものを明瞭ならしめると共に、果してそれが秦銅器と稱して可なりや否やを根本的に反省するの調査に從事した。其の結果は既に表題に所謂なる二字を冠したことに依つて知られる如く、伴出したと云ふ戈の銘は、それ自體に秦器と認むべき確證のあるものではなく、また種々の點から此の類を短い秦代の作品とするの當らないことをほゞ究め得たが、同時に器の有する通性に於いて、うちに從來著しく對照的な三代と漢との二型式の中間型を示すものがあり、また其の技巧の上に兩者に見られない處の種々の重要な事實の存在も注意に上つて、該銅器に關する興味が深められた。で歐米の滯在中彼地の流行の潮流に棹して廣く類例を求め、右の見解の修築に志念したのであつた。而して昭和四年四月歸朝後幸にもこの東方文化學院京都研究所の一員として支那古銅器の研究に從ふの便宜を得たので更に關係資料を國内に求めて、今や遂に其の整理の時期に達したことを欣びとする。是等の調査の詳細は他日報告書として提出するの豫定であるが、此の學院開所式記念講演會なる與へられたる好機に於いて、ワニエック氏の將來品を中心として所謂秦銅器の示す事實の概要を紹介し、それに關連した所見を開陳して、先づ諸先生並に先輩の御叱正を乞ふことにしたい。

二

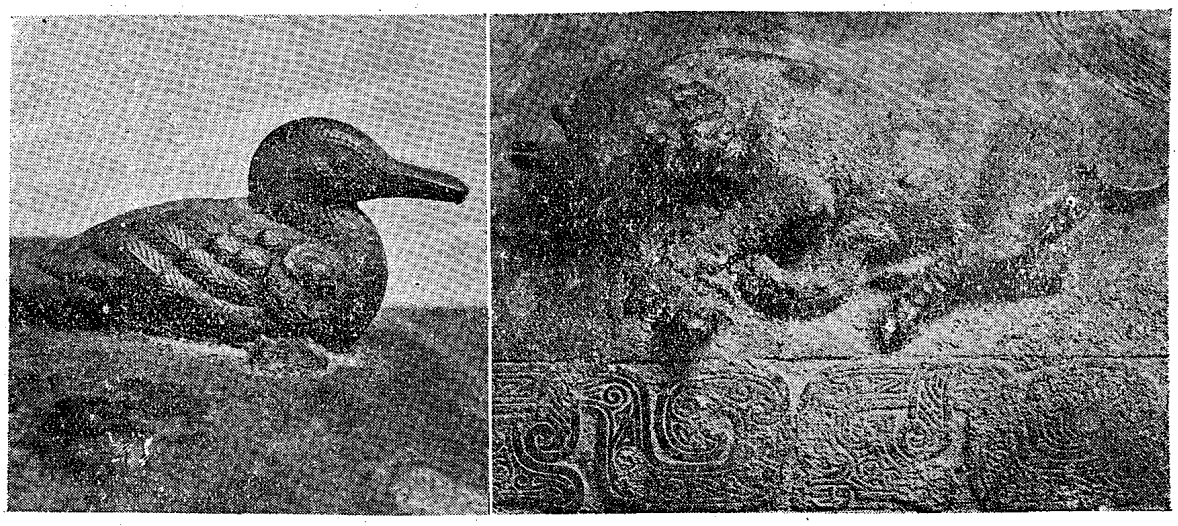
さて右のワニエック氏の獲た Li-Yü の發見品から注意を惹くことゝなつた所謂秦銅器なるものは、既

にダルデン・ド・テイザック氏が、其の著『支那古典美術』(H. D' Ardenne de Tizac ; L'Art Chinois Classique, Paris. 1926.)に、將來品の若干を擧げ、シレン博士また近刊の『支那古代美術史』(Osvard Sirén ; A History of Early Chinese Art. London. 1929-1930)の第一卷に數例を採錄して、其の特徵として器が概して薄手に作られ、形の上に輕快味を持つことゝ、全面を飾る文樣が平面的な表現法を取り、主として虺龍の絡み文、即ち所謂蟠螭文から成ると共に、一部分に寫實的な丸彫の禽獸形などの飾りを附した點を擧げ、それが殷周銅器の壯重嚴肅な器形に、グロテスクな饕餮文などを附した類や、別に同じ輕快で實用的な器形ながら漢代の流麗にして自由な表現の所謂波狀文を主な圖文とする銅器と相違することを指摘してゐる。なる程如上の特性は所謂秦銅器に著しく表はれたものではあるが、更に舊(モト)に遡つて總數五十餘點あるワニエック氏將來品を通觀して見ると、うちに圖文乃至表現の手法に於いて、如上の類に入らないで而も從來の銅器と著しく對照的な遺品を存し、それ等と前者の特徵とを一層深く究めることによつて、所謂秦銅器の性質の全豹を明確ならしめるものがある樣に思はれる。で寫眞に依つてそれを說明することから記述に入らう。

ワニエック氏の手に入れたLi-Yü遺跡發見のフンドは、初にも記した如く、銅器をはじめ漆器、土器、骨角器から玉器の類にまたがり、其の大部分を占めた銅器に於いても、單に容器並に附屬具などにとゞまらないで、ボタン狀の裝飾品から、帶鉤、戈、劍、弓弭と覺しい遺品、車軸頭、轡の銜と其の飾板等種々の類を含んでゐる點で甚だ豐富な內容を持つたものと云つてよく、うちに轡の飾板の如く所謂スキ

タイ風の特徴を具象したものや、表面に貼金したボタン狀飾、銅劍に見る金錯の銘文、孔雀石の嵌入加飾などの技巧並に表現の上に注意を惹く類を見受ける。さり乍らいまは論旨の簡明を期する爲に自餘の遺品と共に是等を一切省略して、しばらく範圍を大形な銅容器の類に限ることにする。處が此の類がまた實は種々の形狀のものを含んでゐるのである。

いまなほワニエック氏の手に保管してゐる大部分の容器に倫敦のオペンハイム氏(H. J. Oppenheim)上記の故ラザストン氏、巴里のセルヌシイ博物館(Musée Cernuschi)故ソファー氏(Late Jean Sauphar)ケルンの東洋美術館(Museum für Ostasiatische Kunst der Stadt Köln)等に分散した類を加へて其の形を見るに、上引の二書をはじめよく圖錄に載せられる有蓋の鼎、同敦、長方形の器體に四脚を附した有蓋の容器をはじめとして、形の全いものに盤、洗、甗、匜、壺、卣、匕の類があり、また破片から一種の盉、大きな罍、楕圓の器體の長軸に添ふて兩緣に櫛狀の耳を着けた棓等の存在が明に認められ、なほ其の鼎の如きは數個もあつて示すところ必ずしも同一ではない。是等の器のうち匜、並に罍は形の上に所謂三代銅器の傳統を示し、また盤は圖版第二に示す如く兩側の肉刻的な獸面飾りと、雄勁な三脚のそれは、故ラザストン氏購入の匕樣品の透彫で厚手な作りと共に古調を帶びてゐるが、他方其の鼎の一は(圖版第一參照)外形に於いて輕快味を加へ、蓋には環鈕の外に三個の水禽と双牛の頗る寫實的な附加飾りを配布して、形態の整美をなしたもの、同樣の丸彫の加飾は敦の蓋(水禽)長方形の有脚器の蓋(羊)等にも存して、

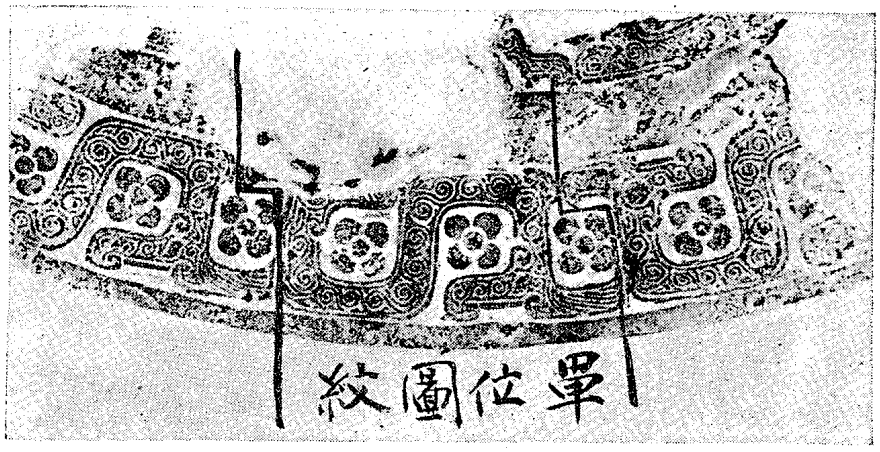


第一圖　所謂秦銅器上の丸彫の加飾禽獸（右羊、左水禽）

そこに一の特性を認めることが出來る（第一圖參照）。而して是等の器の示すところ、爾餘の卣、甗、洗、甑などや、破片から考へらるゝ棓などの形と共に、從來知られた漢器に相近いものがあつて、製作が概して薄手に、また鑄上りのすつきりとしたのは、三代の器の壯重嚴肅なると著しい對照をしてゐる。右の自からなる共通點こそ所謂秦銅器の形の上の特色と見るべきものなのである。

次に器を飾る圖文としては、既述の立體的な禽獸形其他の加飾を其の一に數ふべきであるが、より一般的なものゝ器の內外に現はされた裝飾文であることは改めて說くを要しない。ワニエック氏の滯歸した Li-Yü の遺品のうちには例へば双壺の如く全く文樣を缺くの類を混ずるが、通じて見られる共通點は其の全面に於ける豐富な圖文の裝飾であつて、これ等から既揭の文樣上の特色なるものが見出されたに外ならぬ。いま多數の器を觀るに、右の平面的な絡み蟠螭文、而して體軀に細密な曲線と直線とから成る地文を埋めたものが中で著しく目立つてゐることは、圖版に示した器の孰れもそれの

最も多く適用せられた點から太だ明である。さり乍ら此の布置の地文的であり乍ら、うちに一の纏まりを其の全面の裝飾の上に持つ是等の圖文の表現に當つて示すところの特異性は、同時に並び存してゐる別な圖樣並に其の表出法と共に看過するにはあまりに顯著なものと云はねばならぬ。前者の文樣表現の特異な點と云ふのは私がこれ等の銅器文の多數を手拓中見出して且つ實證した一定の單位の圖文の型に依る繰返しての配布である。即ち器體を繞る圖文は一見したところではすべて連續した形で表はされてゐるが、その實は殆んどすべての場合に於いて第二圖の實例に見る如く、指示した一區の圖文の全然同じい反復表出に過ぎない。從つて右の表現は當初該單位の型が作られ、それを鎔範の上につゞけ印すると云ふ方法に依つたものとするの外なく、こゝにそれが彼のローマ時代のアレッタイン陶器(Arretine Pottery)の圖文に認めると略ぼ同じい機械的な表出方法に依つてゐると云ふ事實が導き出される。而して右の認定から上記の丸彫乃至半肉刻的な禽獸や獸面などの加飾を顧みると、それが又器に依つて全く同じ形の繰返されてゐること、即ち型の使用が認められるし、同じ手法は次に擧げる別個の圖文に於いて一層顯著なのが知られる。でこれは



第二圖　所謂秦銅器文の單位文指示拓影

Li-Yü 發見の所謂秦銅器に普遍な裝飾文の表出法として特筆すべきことになるのである。

後者即ち發見の銅器に見ゆる蟠螭文以外の著しい圖文としては、圖版第二の盤の緣に印された鑄沈めの獸形文、而してそれに一種の象嵌の施されたものを先づ記す可きである。此の象嵌の沈文は本フンドではいまケルンの東洋美術博物館の有に歸した獸首飾蓋の鼎に見るS字形文に類例を見るに過ぎないが次項に擧げる如く自餘の所謂秦銅器に顯著な遺品が多くて、うちに右の盤の緣に表はれた四個の疾驅した怪獸の側面形の反復に純銅と覺しいあまり引き立たぬ象嵌を施したと同じ手法を以て、一種の狩獵の光景を寄せ繪的に表はしたものなどを見受けて、それが所謂秦銅器の文樣の一特徵をなしてゐるのを肯定せしめる。故ソファー氏所獲の器の半ばを失つた他の盤の內面に印した沈み線文の一種の畫象は禽獸人物爬蟲類を表はし、個々の圖像の寫實の妙を得た點からティザック氏の注意に上つて其の紹介を見たもの（"Artibus Asiae" 1925. No. III）これは圖版第三に示す如く象嵌がなく、細部まで線刻となつてゐる點が繪畫的のものとして頗る珍らしい類ながら、他方個々の獨立した形を集めた全くの寄せ繪で、遠近法や大小など考慮の外にあつて純粹な繪畫としての纏りのない幼稚な點で、いま述べてゐる類に似通つたものなのを考へしめる。なほ前者の盤の內面に薄肉刻の水禽、魚、鼈の三者を型に依つて碁盤の目狀に配布してゐるのは、水を盛る盤の用途にふさはしい圖象としてまた感興に上るが、裝飾としての表はし方ではやはり一種の地文的な原始的なものと云ふ可く、而して是等の裝飾文のある器が孰れも同時に外面の飾りに絡んだ蟠

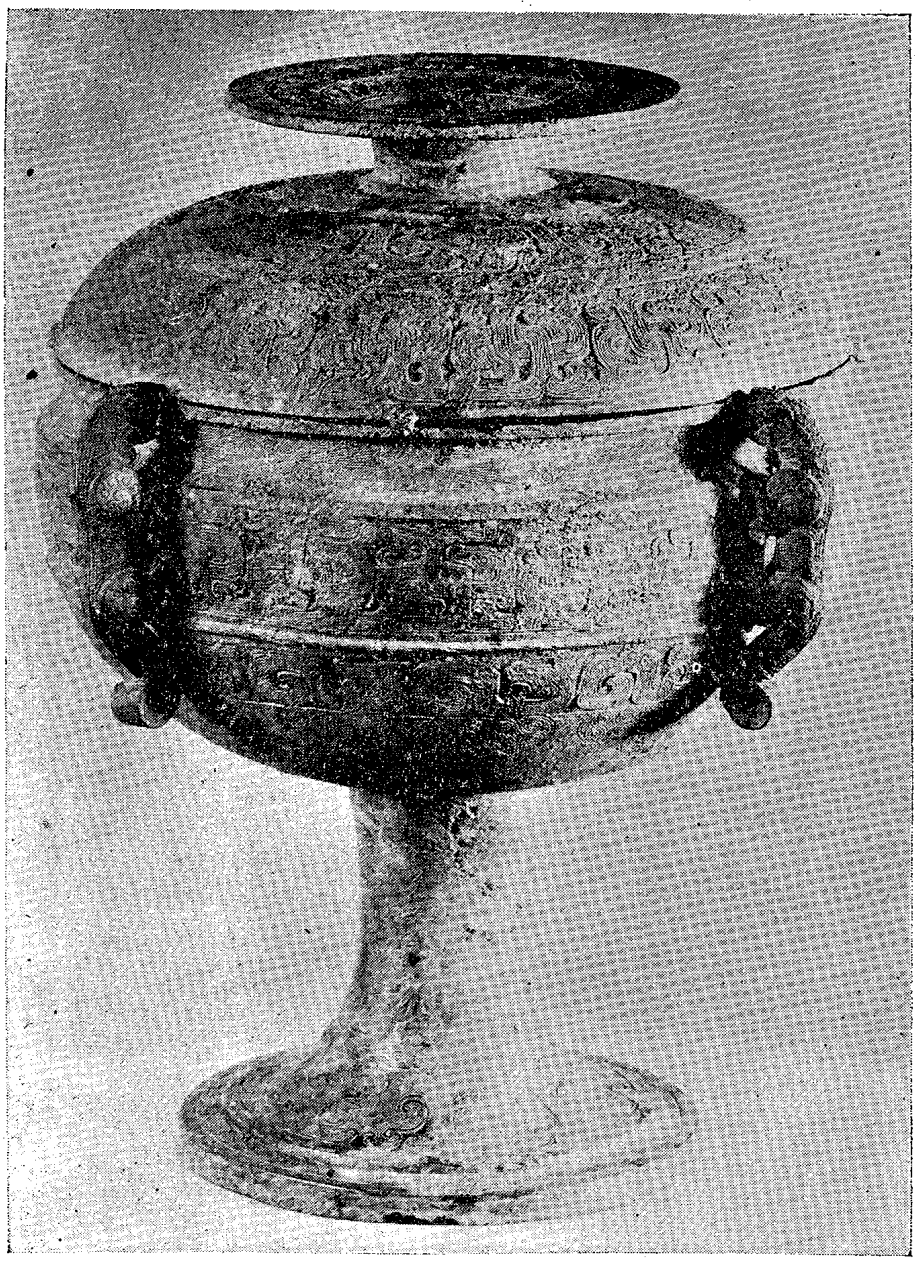
螭文を印した類であるところから、動物形を主とした畫象文として、初に記した一種の象嵌を施した類と共に、所謂秦銅器に用ひられた著しい裝飾圖文とすべく、同代に於ける種々の手法の並用が認められるのである。なほ此の外一例ながら上記のケルン博物館の有に歸した鼎に嵌石の本來のまゝの狀態をとゞめてゐることは、銅劍の柄部に於ける孔雀石の嵌入と共に、それが一のフンドである點で、該技術の同時に存在したのを示すものとして注記すべきであらう。

三

以上はLi-Yü出土の所謂秦銅器の特徴に關する概觀であるが、同じ樣な性質を持つ遺品は初に一言した如く、古く宋代以來の著錄に見えてゐるのみならず、內外の博物館、聚集家の手にも存してゐた。而して右の一類が秦銅器に對する學者の興味を惹くと共に漸次世に出ることになり、また新しい遺品を續出せしむるの氣運を助長して、近時所謂秦器の發見は實に夥しいものがある。是等は單に大形品に限られないで、各種の小金具から玉製品の上に及び、また所謂秦鏡なる一群を見るのであつて、其の種類の多樣から、支那工藝美術の上に此の類が一の特殊な地步を占めるものなのを想察せしめると共に、是等を觀察することに依つて上記の特徴のより明確ならしめるものゝあるのが知られる。で次に私は歐米で觀た重な例に、本邦に齎された若干の遺品を添へて、いま其の範圍をしばらく同じ銅容器に限り、それ等

から既述のLi-Yüの遺品に表はれた特徴をより明瞭にするの資に供へたい。其の自餘のもの、即ち所謂秦鏡、玉類等に對しては他日考査を新にして同じ性質の開明に資すべきを期する。

さて其等の大形の銅器のうち圖樣の上で第一に記した特徴を具有した器としては米國ボストン博物館、瑞典のゲーテボルグ博物館等所藏の有蓋蟠螭文鼎を先づ擧ぐべきである。二者共にLi-Yüの銅鼎と殆んど規を一にして、其の後者の一部には所謂秦銅器文に往々見受けるところの子安貝文を配したのが引き立つてゐる。シカゴ美術館所藏の大きな銅甗は同じ地



第三圖　蟠螭文豆（紐育メトロポリタン博物館藏）

文的な裝飾に奇古な調子を遺存する獸面飾りの把手を附したもの。紐育のメトロポリタン博物館所藏の有蓋蟠螭文豆は京都藤井善助氏所藏の鳳凰形蓋の匜と共に鏽色其の他の點からLi-Yü出土品中の早く佚した類と解せられるもので、其の前者は形第三圖の如く、身の側面にある丸彫怪獸形の加飾は鑄上りの精と其の生々とした寫實的な表現に於いて、後者の蓋の鳳凰形と併せ觀る可く、それは器に施された蟠螭文のメキヤニカルな表面地文の手法と可なり著しい對照をなすものである。ストックレー氏珍藏の大きな鑄銅の龍形は其のスケールに於いて固より如上の動物禽鳥の類と同一に論じ難いが、伯林の國立博物館東洋美術部藏する相似た斷片と共に、同じく大きな容器の飾りであつたと認めらるゝもので、其の手法に一脉の相通ずる處があり、本來想像上の動物形乍ら寫實味を多分に持つてゐる。處が此の遺品は今春北平大學の手で遺跡の一部分の發掘調査を行ふて戰國時代の燕の下都たるの徵證を得たと云ふ河北省易州城外の發見に係ることの明な點で、右の同似が學術上の價値と興味を加へるわけである。紐育のホームス夫人(Mrs. Christian R. Holmes)所藏の小編鐘、瑞典の國立歷史博物館東洋部藏する大形の銅鐘はブラッセル市のストックレー氏(Adolphe Stoclet)其他の珍藏する銅鐘と共に蟠螭文の表現がやゝ肉を持つた上に、別個の圖文などをも見受けるが、型に依る同一文の繰返しの明に認められる點や全體の調子などで固より同じ一類と云ふ可く、獨逸の國立博物館東洋美術部と紐育のホイト氏(Charles Hoyt)の許とに各一個を見る大きな鐘の甬部は、其の表面の飾りが、前者とは違つて、全く平面的に標式の蟠螭

文を布置した好例をなしてゐる。華府のマイヤー夫人(Mrs. Eugene Meyer)の珍藏する鳥尊は、いまオペンハイム氏の有に歸したLi-Yü出土の獸形、一時伯林のローゼンハイム夫人(Frau E. Rosenheim)の許にあつた水禽形銅容器などと共に、其の珍らしい器形に寫實的な要素を示し、又體軀に蟠螭文を配して、所謂秦銅器の特徴を具備したもの、これを紐育のムーア夫人(Mrs. William H. Moore)我が住友男爵家所藏の三代の鳧尊と比較すると、其の間の違ひの著しいことが明瞭に認められる。一九二三年の秋に河南省新鄭縣の古塚から發見した百數十點より成る一群の銅器のうちに、また此の類若干の存することの傳へられてゐるのは重要な事實と考へる。私はまだ實物を精査するの機會を得ないが、別に同時に出土したと信ぜられる飾具の貼金に、全く同一の絡み虺龍文を打出してタガネの細彫を加へたものを瑞典の國立歴史博物館の東洋部と北平の地質調査所とで實見して右の銅器文の同じかるべきを類推したことであつた。

右は文樣を構成する分子まで同じい例の若干を擧げたに過ぎないが、それの違つた式で、而も形なり、圖文の表出法に於いて全く同一の遺品となると、其の數の更に多數に上るものがある。論述の簡明を期して其等の一々に就いての說明を他日公にすべき報告書に讓ることにするが、例へば其の鼎に於いては伯林の國立博物館東洋美術部藏する有蓋雷紋の銅鼎はじめ、我が京都の藤井善助氏收藏の鼎二個の如き孰れも上記のものと同一の器形を示し、文樣また型に依つて繰返(リピート)されたもの、其の前者の雷文の如きは

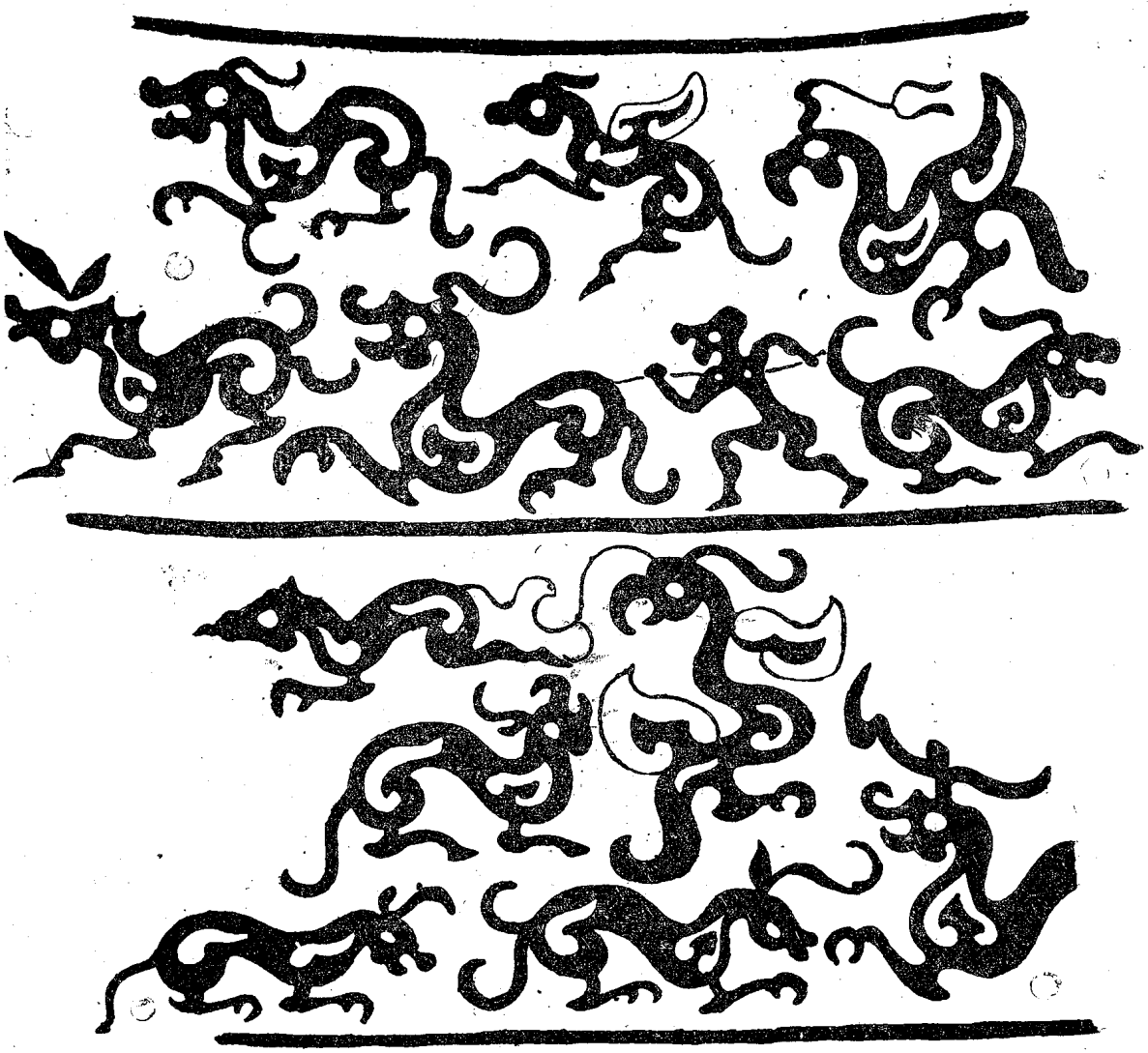
所謂三代の器の地文に見る系統を傳へながら、表出に於いて太だしい相違を存し、Li-Yü 出土銅器のそれに合致してゐる。巴里のセルヌシイ博物館藏する大きな洗、我が東京帝室博物館の收藏に係る兩罍（第四圖參照）などは其の殆んど全面を覆ふた文様が平面的な地文でありながら、一部分に肉を持たせて薄肉刻の手法を加味した一種の變様獸文から成つてゐるもので、一見古調を帶びて、マイヤー夫人所藏の蟠螭文匜等と共にやゝ違つた類の如くに見ゆる。瑞典のカールベック氏は同じ薄肉刻的な圖文を印した小銅製金具類多數を戰國末に楚の最後に都したと云ふ河南省の淮河の流域で蒐集して瑞典に齎し歸つたことから、同國のシレン博士はそれに特に楚様式なる名稱を與へて所謂秦銅器に對立せしめた（上引同氏の著書參照）。さり乍ら仔細に此の類を觀ると、其の地文は既記の鐘の類に酷似しうちに渦文などを埋め、また所謂秦

第四圖　獸環飾獸文地罍（東京帝室博物館藏）

鏡中の地文の或物と同一である上に、表出に於いて型に據る同形の反復が明に認められ、器形の輕快な點でも上來の諸器に共通してゐる。で同じく所謂秦銅器のうちに加へて、其の一分派として然るべきであらう。

圖文の上でLi-Yü發見の所謂秦銅器を特色づける他の一の所謂畫象文乃至象嵌の類は、歐米に齎された自餘の遺品に其の特色が一層顯著に表はれてゐて、其等に依つて前者でなほ充分でないところを補ふことの出來るのが嬉しい。此の類として先づ擧ぐ可きは華府のフリヤ美術館所藏の象嵌狩獵文の銅洗である。本器は其の四方にある獸面飾りの

第五圖　象嵌禽獸文壺(シカゴ美術館藏)



第六圖　禽獸畫象文卣圖樣模寫圖

把手に所謂秦銅器の特色が見られるのみならず、其の内面にはLi-Yüの一個の有脚盤に於けると同様な水禽、魚、鼈三者の碁盤目狀に布置した裝飾並に緣に獸形の象嵌を存するもの、而して外側面には一種の複雜な狩獵文を地文的に象嵌した點がまことに珍らしい。處が此の外側の狩獵文たるや型に依る個々の形を組合せて大さの違つた畫象の單位圖を作り上げ、更にそれを帶上に反復して表出した痕が明に認められるし、うちに原始的な表現の車に依る狩獵の光景を寫した圖が見られて深甚の興味を與

へる（『桑原博士還曆祝賀東洋史論叢』所收拙稿「米國フリヤ美術館所藏の象嵌狩獵文銅洗」參照）。伯林の國立博物館東洋美術部藏する提梁附の壺（卣）の全面を飾る圖紋また、第五圖のシカゴ美術館（Art Institute of Chicago）藏する銅壺と共に同じ類の著名なものとして、前者は人物に配する禽獸形が面に鑄凹められ、それに純銅と思はれる物質を嵌入して拓影的な裝飾文をなし（第六圖參照）後者また略ぼ同じ法で、共に禽獸の形に特色が見られ、後者には夔鳳形をも混じてゐる。而して是等が或單位の圖形の型に依るリピートであることは、いまメトロポリタン博物館にある同じ圖文で象嵌を闕いた一個の鼎の示す實際から知られる。ブラッセル市のストックレー氏と東京帝室博物館とに各一個を藏してゐる所謂百獸壺また同じ型に依つて繰返された禽獸形に人物を配した帶を、絡み虺龍文で自由さを加へたものに配して、上下數帶に分たれた器の全面を飾つた遺品であるが、其の圖文は象嵌で表はされてゐないで、圖の周圍の空所を彫り沈めて、拓影的な沈凸文で形を示したのを特異とする。同じ式の類例は巴里、伯林などでも二三見受けたので、これまた當代一部に行はれたやり方と思はれる。

孔雀石其他の物質を圖文の間に嵌入するところの加飾はLi-Yüのフンドにあつては其の銅劍柄の飾りと一個の鼎とに見受けるに過ぎないこと前段に指摘した如くで、これは金銀錯の手法と共に寧ろ漢代の帶鉤等に其の最も著しい發達を表はしたもの、即ち漢樣式の一特徴と解せられてゐる。實例に見るも故トリユブナー氏（Dr. Jörg Trübner）所得の帶鉤や、我が守屋孝藏氏所藏の同じ例には背面に銀象嵌で製

作の年時を表はした類を存して前者の示すところ建初元年、また後者は永壽元年とあつて共に漢代の遺品なのを明示してゐる。さり乍ら大形の銅容器に時に豐富な其の裝飾の摘用せられた遺品若干に就いてはそれがまた此の場合注意に上るのである。華府のマイヤー夫人並に費府の大學博物館所藏の鈁などは中での著しいものと云ふ可く、全面に布置した文様は獸面から脱化した一種の華文から成つて、空處に孔雀石等を嵌れたもの。帶鉤文に比して配列の嚴正な點其他で古調を帶び、特に後者は肩部にある環座の獸面の形式がLi-Yü出土の器に見ると軌を一にした古式に屬して、漢代の器のそれとの間に相違を存し、また台座の周圍には篆隷の間にある細い刻線の銘文を表はして、この類を所謂秦器のうちに加へて然るべきものなのを考へしめるものがある。而してそれはまた主文様の表出に於いて型に基く反復法の使用の明に認められるものなのである。

かく類例を擧げるとLi-Yü發見の遺品からした所謂秦銅器なる一様式は、其の分布が局部的でなくて、各地から見出されてゐることが察せられ、一見多様に思はれる諸類のうちに一の著しい共通點を持つのが知られて、形式學上それ等を一群と見做すことの自然さが自ら考へられて來る。いま如上の論述の總括として、重ねて其の特質なるものを抜き出して見るに、先づ器の作りが割合に薄手であつて、形また概して輕快味を帶びてゐることに通性を見るが、より一層顯著な特徴は器を飾る圖紋の表出法に於いて認められる。即ちそれは著しく地文的となつたものを一單位の型に依つて繰返して全面に布置した事で

ある。而して右の圖文の單位をなしてゐるものは必すしも一樣でないが、中で虺龍の絡んだ圖形でその體部に一種の渦文を埋めた類と、動物乃至人物などの畫象の沈文に一種の象嵌を施したものの特に優勢なのがまた認められる。時に加飾した立體的な禽獸形に寫實の妙を傳へた類のあることも、孔雀石等の象嵌の施されてゐるものの存在と共にまた性質の一部を構成するものとして擧げられるのである。なほ初に記した如く此の類の器が殆んど全部銘を闕く點も云はゞ特色とも解せられよう。序に附記するが、此の類の銘文を有する器で私の囑目したのは上記の費府大學博物館の鈁、伯林の國立博物館東洋美術部の象嵌畫象文の卣の長文の二例に紐育の山中商會で觀た大きな鼎、京都藤井善助氏藏の鍾などを數へるに過ぎない。是等の銘の書體は鐘鼎文と違つて、篆隷の間とも見る可き細い一種の體のもので、長文の二例の如き解讀のかへつて困難な類に屬して、そこにまた特異性とも云ふべきものが見られる。

四

さて私はLi-Yü發見品に對する西人の注意に刺激せられて、實物の觀察から、新たに右に數へた如き性質を持つ銅器の樣式の支那の國土に於ける存在を認める歸結に到達したに就いて、然らばそれが從來の支那古銅器の樣式に對して如何なる關係に立ち、又其の年代觀が何れにそれ自らの位置を得べきかゞ更に新たなる問題として關心に上るのを覺ゆる。此の問題の考察は上記の銅器群の性質をより明確なら

しめる上に重要であると共に兼て秦銅器なる名稱の可否の點にも聯關するところのもの。而してそれに對する考古學上の觀察としては從來知られた著しい樣式との比較が當然試みらるべきことは太だ自明である。即ち此の場合夏殷周なる所謂三代の銅器の持つ性質との詳しい對比の外に、他方支那古銅器界に於いて從來前者に對立する一樣式とせられてゐる漢器との比較が行はるべきである。所謂殷周の古銅器の持つ特性や漢器の有する性質をこゝに明確に指示することは容易でないが、多數の實物乃至既刊の著錄から推測せられる如く、前者は器形の嚴肅奇古と圖文の奇怪（グロテスク）な點に樣式の特色を示してゐるのに對して、漢器は輕快に且つ薄手に作り上げられ、器を飾る文樣の流麗なのを特徵とすることは一般に認められてゐるところである。右の大體論に加へて、圖文の表出に就いて近時到着した兩樣式の示す特色に對する吾人の所見を擧げると、總じて整齊な配布をなすことは支那古銅器文の通性とせられるが、漢器にあつては素文の類が割合に多くて器形の輕快と照應し、環座の獸面飾りを除いては、そのこれあるものは刻線で所謂波狀樣文などを均勢的な規矩のうちに多分の自由さを盛つて表はした點の目立つてゐるのに對し、所謂三代の樣式は饕餮、虺龍、夔鳳などの繁縟な肉刻的の圖文を以てし、それを器の全面に嚴正なる左右均勢的に二回又は四度繰返してゐるが、而も型に依つた痕迹がなく、器形の圓に適應する爲に一々が正側面から同時に一の形として觀得る如く表出されたところに大なる特性が認められる。從つていま問題の所謂秦銅器の性質を三者に對比すると、其の文樣の表出法に於ける平面的な型に依るリピ

ートの特質が先づ目立つて、該見地から此の類を一の樣式とするの妥當性を確めるが、通じての觀察からは、一面絡み蟠螭文や其の奇古な獸面飾りなどに殷周の器の虺龍文乃至饕餮文に於ける類似點を持つとは云ひながら、器形や製作の上では殷周樣式と著しい相違があつて、それ等の點では寧ろ漢器に近い性質を備へてゐることが注意せられる。然らば進んでそれを漢樣式のうちに包括し得るかと云ふに、近者十數年の間に學者の發掘した確實な遺品、即ち朝鮮の樂浪郡時代の遺跡の出土品をはじめ南滿洲、蒙古、印度支那等の漢代の墳墓から出たものや、器自體に製作年代を明證する銘を存して漢の盛時たることの知られる遺物などに依つて、其の性質の極めて明確の度を加へた漢器とは上記の圖文の表出法の相違は固よりのこと、種々の點に相違があつて、大體それよりも古調を帶びてゐることが、時に兩者に存する獸面飾りの環座や獸脚などの上に表はれた差異から認められる。而して同じことは秦樣式の地文的な圖文を漢器の波狀文の發達した所謂雲氣文などと比較するに於いて一層明瞭に看取せられよう。然らば其等の比較から導かれるところの歸結なるものは、所謂秦銅器なる樣式は支那古銅器中にあつて、從來知られた漢器に近い性質を有し乍ら、而もそれに先立ち、一部分に所謂殷周器に類似を持つた兩者の中間型として、なほ自らに獨自の性質をも持つてゐると云ふことになる。前段の末尾に附記した銘文の示すところ、固より少數例ながらまた同じ推論をなし得てそれと矛盾がない。

以上の比較考察の結果が認容せられると、それから第二の年代觀も亦自ら推知せられるわけであるが、

是等の銅器は概ね近時注意に上つたものである關係から、支那の遺品として珍らしく、出土地の分明した類を含んで、よし細部に於いて吾々を滿足せしめ得ないとするも、概括的な論述の據所をその方面に見出し得るのは特筆に値する。尤も此の點に於いて秦銅器なる名の依つて起つたLi-Yü發見に係る秦代の銘のあつたと云ふ戈は、ワニエック氏のスケッチの示すところではかゝる確證のあるものでなく、また小川琢治博士の高見ではLi-Yü地方は秦の領域であつたとなし難いとの事なので、全く據所を失ふわけであるが、既に指摘した如く、右の特徴が故王國維先生にはじまつて近時支那の金石學者の研究から西紀前四五世紀のものに比定せられた河南省新鄭縣の銅器のうちに見出されるのをはじめ、カールベック氏が同じく一群のうちに加ふ可き圖文表出の小銅器を戰國末に楚の據つた淮河の流域から多數に蒐集した事實があり、更に河北省易州の燕の下都からも上記の如き遺品が出てゐるのは即ち別個な考古學上の方面から如上の歸結を裏書するものであり、同時に年代推定上に重要な據所を與へるものであらねばならぬ。而してこゝに問題の銅器を秦代の遺品とするの當らないことが示されると共に、該類を以て戰國末に存し周漢の中間に實年代を置く可きものなのを或確かさを以て云ひ得るのである。然らば本類を秦銅器と呼ぶのは事實に副はないわけで、こゝに戰國の銅器と云ふ稱呼變改の要が、如上の歸結から提唱せられる。たゞ此の樣式は中間型とは云ひながら、漢器に近くて、其の先驅たるの趣を多分に持つ點が戰國式と云ふにややふさはしくなく、うちに寧ろ秦なる名稱の相近い感を與ふるものを藏し、なほ該稱

呼の今や廣く行はれてゐるので、こゝでは假りに所謂なる二字を冠して、しばらく從來の名稱に從ひ、徐ろにより適當な命名の行はれる期を待つことにする。

五

所謂秦銅器が支那古銅器の樣式系列のうちに右の如き位置を占むることゝなると、從來其の示す性質の上に强い對照をなしてゐた所謂三代の樣式と漢器との二大群は、こゝに中間型が示されたことになつて、其の樣式の推移に新しい觀點に立つ考察を豫想せしめ、それが研究の上に一の進境を齎すべく思惟せられる。さり乍ら此の場合示現する所謂秦銅器の樣式が、上述の如く中間型とは云ひながら、前者よりも漢器に近い點の多いものであることは、支那の古銅器を最も特色づける所謂殷周の器形や圖樣が其の發展乃至變遷の過程上如何にして右の段階に到達したかに對する考察、即ち新樣式出現の因由に關する興味ある問題を提起することになる。

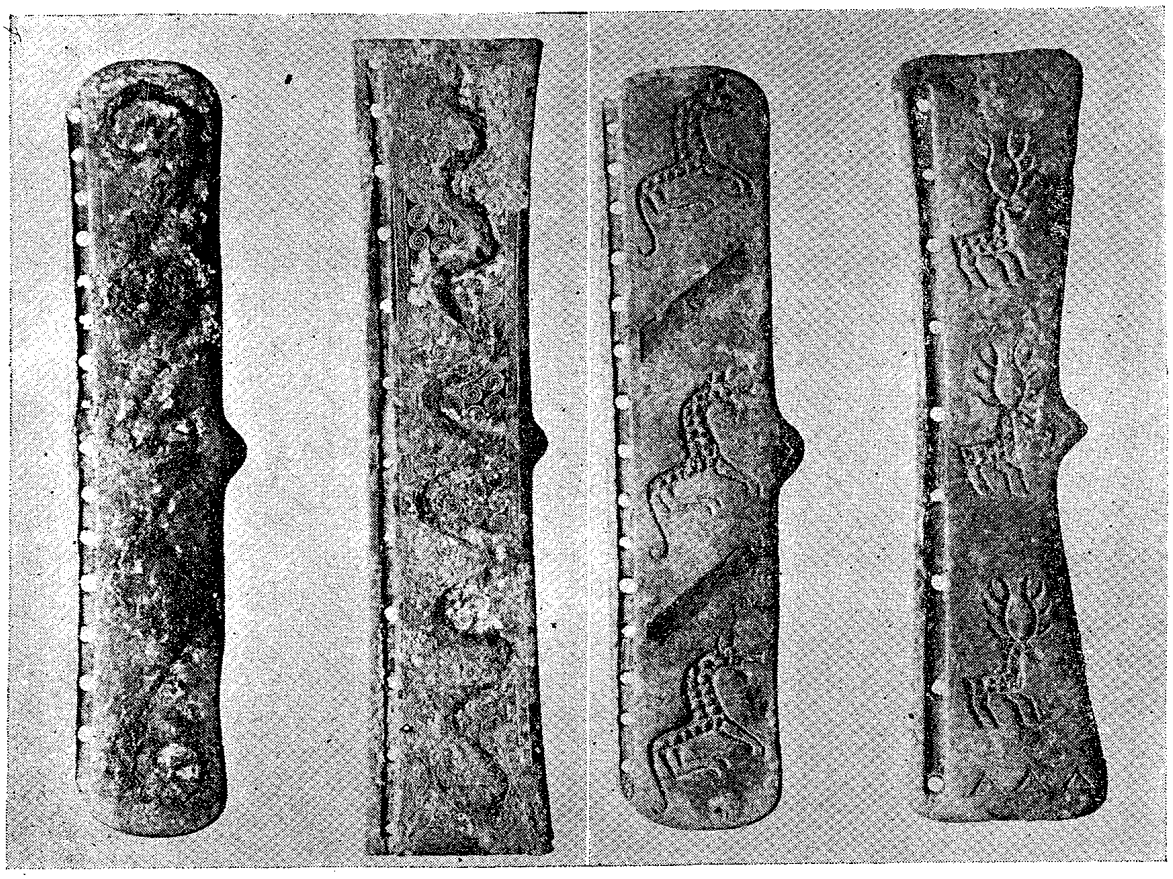
既に指摘した如く所謂秦銅器のうちには匜や罍など形の上に殷周の器と類似を持つものがあり、表面に印した圖文が地文的となつてゐるとは云ひながら、嚴正な均勢的の構圖を示し、中で一番目立つ絡んだ虺龍文の如き、また環座や脚の獸面飾りなど、それ〴〵に殷周器を飾る虺龍、饕餮文の流れを汲んだものと解せられ、なほ其の蟠螭の躰をうづめた渦文地も形式の上からは殷周の器の地文として著しい雷

文から進んだとも見られる。秦様式の最も顯著な性質をなすとした型に據る同じ圖文を反復する表出法の如きも、本來の殷商の器の裝飾が嚴正な左右均勢で、同じものを繰返した配列をしたものであるところから遂に考へ及んだ一の便法として、それ等から殷周の器より所謂秦銅器への發展を考へる處の系統觀を立て得るわけであつて、それが支那古銅器中前者に次ぐ時期のものと認められる以上當然なことでもある。さり乍ら秦銅器を通じて見られる形の輕快さ並に圖文の流麗化は上に擧げた外面に表はれた諸點の相似と違つて、その上に盛られてゐる內容乃至表現の心理に於いて太だ特殊な色彩を帶びたものなのを否み難く、更に圖文のうちの繪畫的な類に至つては、時に夔鳳形や獸面などを見受けはするが、象嵌の手法と相待つて、殷周の器には類例の遠いものでうちに古拙ながら狩獵圖や鬪牛圖乃至馴鹿などの表はれてゐることは、動物自體の形と共に頗る目新しい。一體支那の所謂三代の銅器なるものは、種々の形態の器を含んでゐるが、其の間に樣式上の別を認め得るの類に乏しく、通して一樣な特性を備へた點で古代の埃及美術の單調と規を一にしたもの、從來の支那の金石學者は單に其の上に印した款識からして或は商器となし、他は周器として區別してゐるが、外形乃至文樣などの上からすると兩者の間に區別を附し難く、嚴肅壯重な器形とグロテスクな圖文とが是等の時代を通じた動かし難い特質として、それが器の有したであらうと考へられる宗教的な用途等と聯關して形式の不變を一層著しいものたらしめてゐる樣に見ゆる。尤も從來は是等の銅器の形や圖文などに就いての形式學上の考察が殆んど行はれてゐな

いので、將來そのうちから吾々がいま秦銅器を見出したと同じ樣に新しい樣式分類をなすの可能性が考へられ、實はそこに支那古銅器研究に對する將來の期待を掛けてゐるわけではあるが、私の囑目した千數百の遺品に於いてそれ等が孰れも相似た形と圖文とを持つことを、周が九百年に近い歷史を有し、殷が更にそれに先立つ王朝として、千年を遙かに超ゆる長期の所產なのと攷へ併せると殷周銅器の形式の固定したものであるのは到底否み得ない。然らば問題の所謂秦銅器はよしうちに先行の殷周の器から受けた分子を多分に持つとしても、かゝる環境にあつては、前者自躰の推移のうちから自ら生じた或段階の樣式と解するには、あまり違つた特質を持ち過ぎてゐると云はねばならぬ。こゝに至つて想起するのは英京にあつた日親炙した倫敦大學のペトリー教授(Prof. Sir Flinders Petrie)が、其の豐富な古代近東文化の知識の上に立つて、一の文化が成熟し固定するや、それを開展せしめるものは新しい外來のエレメントの加はるにありとせられた明快な高說であつて、當面の事象の解釋はこの見解を容れることに依つて自然的な歸納の得らるべきを私かに思惟するのである。

所謂秦銅器の出現に對してかく外來の影響なるものを考ふるの概念性を認めることになると、次に實際の問題として、然らばそれが何れより來たか、また新しいエレメントが何であるかの一層適切にして且つ重要な點を究むるの要を生ずる。たゞ此の具體的な考察となると、徵證として最も緊要な支那四隣の考古學上の調査が支那自體のそれと共になほ極めて不充分の狀態にあつて、比較研究の資料を得難い

のを憾とする。十九世紀の末葉以來、中央亞細亞の學術探檢が東西の學者に依つて行はれ、其の成果が世に傳稱せられて古代に於ける東西交渉の痕が頗る明瞭の度を加へたと云はれてゐるが、それ等は概ね漢代以降のものに限られて、こゝに問題となつた分野には、なほ殆んど光明が投ぜられてゐない。さり乍ら理論の上から、單に支那の文化の波及に依つて發展を見た地方にかゝる根源を考へ得ない以上、其の影響は西か北か將た西南かにありと見なければならない。いま實物に就くに既記の圖像ある銅器文に於いて吾々は漢の畫象石に其の發展をあとづけ得ると共に、圖像の遠近法を缺いた平面的な表出にバビロン、アッシリアの宮殿壁の彫刻畫を思ひ出させる或物を認めるし、また馴鹿の形の表はれた處に南露から西伯利亞に榮えたと云はるゝ北方游牧民の文物、一部學者の云ふ廣義のスキタイ系のそれとの類似を考へしめる。而して形の輕快化乃至圖文の流麗化(リフアイン)なる、より一般的な特質に西方ヘレニズム文化の持つ著しい其の傾向を想起せしめるものがある。是等から西方文物の東方への波及を以て其の因由とする考が自ら生ずるわけであるが、更にそれ等に加へて、所謂秦銅器に見ると極めて酷似した獸形を同じ表出法に依つて表はした類のコーカサスのコーバン地方(Koban, Caucase)に於ける鐵器時代初期の遺物に盛行したのを見出すことは、云はゞ右の考察に新しい脈動を與ふる事實とせられよう。此のコーバン地方は十九世紀の後半佛のシャンテル(Ernest Chantre)ド、モルガン(J. de Morgan)等の調査開始以來、多くの學者の努力に依つて、多數の同代の墳墓から鐵製の利器と共に夥しい銅製の遺品を發見して、いまそ



第七圖　コーバン發見帶金具

れ等が巴里郊外のサンゼルマン古代博物館(Musée de St-Germain-en-laye)伯林の國立博物館史前部(Staatliche Museun, Berlin.)ウインの自然學博物館(Das Naturhistorische Museum, Wien.)レニングラードのエルミタージ博物館(Gosudarstvenni Ermitazh, Leningrad.)等に分藏せられ、遺品の豐富なること人目を驚かすに足るものがある。處がそのうち特色のある銅斧頭には細かな直線文や渦文などの間に動物形が表はされ、また長大な銅製帶飾には同じ渦文其他の地文の間に型に依る同一獸形や虺形の繰返し圖文を見受け、沈文となつた其の圖紋に鐵を象嵌してあまり引き立たぬ拓影的な加飾をなすところ、支那の紳(大帶)に比すべき銅板面の群獸人物の裝飾(伯林博物館藏)と共に所謂秦銅器の

一の特徴を其の儘に現はしてゐる點に吾々の興味を唆るものがある。尤も秦銅器と是等とは器形が全然違つて居り、またコーバンのそれは、シャンテルやド、モルガン等に依つて紀元前千年代の古拙なものとせられてゐるので、兩地が遠く相離れてゐる點と相俟つて、それを俄かに同一視し難く、兩者を結びつけてそれに所謂秦銅器の基くところを求むるの見解以外に偶然の暗合とするの現在では寧ろ安全なるべきを思ふ。さり乍らコーバン發見遺物の實年代は近時學者の再調査に依つて西紀前五六世紀とする說が有力となつて、時代の上で所謂秦銅器と接近を示すことになつたのみならず、また南露、西伯利亞乃至北支那に於ける近時の考古學上の發見からして、一見非常に遠隔な兩地も、西伯利亞を中にして其の連絡を考へることの必ずしもあり得べからざる事が推測される樣にもなつた。西紀前六七世紀以來南露を中心として榮えた所謂スキタイ文物東漸の事實はその一つの例であつて、一九二四五年に於けるカズロフ氏(P. K. Kozloff)の北蒙古ノイン、ウラでの漢代文物と西方の所產との共存した墳墓の發見は其の最初の曙光と見る可く、瑞典のアンダーソン敎授(Prof. J. G. Andersson)の甘肅鎭番に於ける彩文土器とスキタイ金具との伴出はそれに一歩を進めた重要な發見であり、更に一九二七年以降の東アルタイに於ける露西亞學者の遺跡の學術調査の好果に依つて、紀元前に於けるスキタイ風文物の東漸並にそれに伴ふ希臘風文化の影響の痕が明瞭の度を加へて、北方を經由した東西文化の接觸の以外に早くから存してゐたことが考へられる次第である。然らば略ぼ相似た時代に於いて固定化した殷周の樣式から所謂秦

銅器の出現したバックとして此の西方文化の東漸を考へると共に、其の新しいエレメントとしてコーバンの銅器の加飾との關係を認めることは現在に於いて一の見解となり得るであらう。此の推定に對してワニエック氏の齎し歸つた Li-Yü の遺物のうちに純然たるスキタイ系の馬の轡飾りのあることや、スキタイ系銅容器の北支那に於ける分布がまた附記せらるべきである。

＊　＊　＊　＊

之を要するに所謂秦銅器なるものは、それ自體に秦器たるの徵證なく、遺品の考察からかへつて戰國末に存在の一點を持つ類として、其の圖樣並に表現の手法に一の特質が認められ、一見中間型とも見ゆる該樣式の出現が、遂に西方文物の影響を考へしむるものを藏して、支那古銅器研究上の一對象が同時に古代に於ける東西文物の交涉に接觸して、その點でうちに多くの興味の祕められてゐることが知られた。上來述べたところは其の一端を與へられた時間內に紹介せんとしたのであるが、言葉が足らないで意を盡さなかつたらうことを私に懸念する次第である。それ等は他日主要な資料を整理して報告書を出版する際に出來るだけ補ふであらう。永い間の御淸聽を得たことを感謝して此の講演を終ります。

【附記】此の一編は昨昭和五年十一月九日東方文化學院京都研究所の開所式の記念講演會で試みた講演の草稿に補訂を加へたものである。當日は幻燈に依つて多數の寫眞を示して所謂秦銅器なるものの器形や文樣を紹介したことであるが、本編ではそれ等を收め得ないので單に代表的のものに限り、別に說明文を書いてそれに代へた。本文の記述に對しては多くの註釋を要することであるが、詳細なる考證を他日東方文化學院から出版する豫定なので、それに讓つてこゝではすべて省略した。（八月十一日）

梅原末治